

／ 卷 / 頭 / 言 /

歴史を「読む」ということ

三菱京都病院 院長 三木 真司

歴史小説が好きである。歴史書を読むのも好きである。学生時代から時間がたつのも忘れて歴史小説を読みふけていた。最初にはまったのは、当時流行の司馬遼太郎。“国盗り物語”“竜馬が行く”“夏草の賦”“播磨灘物語”“翔ぶが如く”といった長編は40年たった今に至るまで繰り返し読んでいます。一番のお気に入りには“坂上の雲”。数年前にテレビドラマ化されたが、やはり期待はずれであった。

“坂上の雲”で司馬遼太郎はロシアという国の本能について、あたかも国家が意思を持った生き物であるかのように描写している。この描写がきっかけとなり、世界各地の歴史に興味を持つようになった。今年2014年から遡ってお気に入り歴史ものをあげてみたい。

25年前の1989年。まさに現代史の転換点であり、戦争の世紀である20世紀が実質的に終わった年である。1989年のベルリンの壁崩壊と冷戦終結を活写した2冊、“東欧革命1989—ソ連帝国の崩壊”ヴィクター・セベスチェン、“1989世界を変えた年”マイケル・マイヤー。またソ連崩壊前後のソ連社会については、“レーニンの墓 ソ連帝国最期の日々”デイビッド・レムニック、“自壊する帝国”佐藤優の2冊。ソ連のある右翼政治家に対する評価が著者により180度異なるのは興味深い。冷戦時代のヨーロッパ通史は、“ヨーロッパ戦後史”トニー・ジャット。

75年前の1939年。第二次世界大戦勃発の年。

歴史小説の範疇からは外れるが、欧州戦線の転換点となった、バトル・オブ・ブリテン、スターリングラード攻防戦を取り上げた、“戦略の本質”野中郁次郎。

100年前の1914年。第一次世界大戦勃発の年、戦争の世紀である20世紀が実質的に始まった年である。この世界戦争でアラブ世界の大国であったオスマン帝国は消滅、現代に至るアラブ世界の混沌の端緒となった。“アラブ500年史”ユージン・ローガン。

150年前の1864年。アメリカでは南北戦争が峠を越え、北軍有利に展開していた。リンカーン大統領の戦争指揮を詳述した、“リンカーン—Team of Rivals—”ドリス・カーンズ・グッドウィン。スピルバーグ製作の映画のほうが劇的ではあるが、150年前から言論とマスコミによる政策決定がなされていた民主主義の伝統と厚みには驚嘆する。

最後に番外編をいくつか。お定まりの塩野七生の地中海三部作、“コンスタンティノープルの陥落”“ロードス島攻防記”“レバントの海戦”。そして現代の崩壊国家ソマリアとソマリランドを描く、“謎の独立国家ソマリランド”高野秀行。このスピード感は癖になりそう。ジャレド・ダイヤモンドの文明ものからは、“文明崩壊”。深く考えさせられる一冊だ。